

黒田官兵衛を巡る

黒田官兵衛ゆかりの地ウオーク(一)

吉田 勝 重

(会員 佐伯市女島)

三月二十三日七時、私たち史談会一行二十二名は、本年度の第一回現地研修地である中津に向け出発しました。今回の訪問地はNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」で賑わう中津です。

黒田官兵衛は天文十五年(一五四六)播磨国姫路の小寺家の家老、黒田職隆もとたかの嫡男として生まれます。

永禄十年(一五六七)家督を継ぎ姫路城代となります。

のち織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕え鳥取城の兵糧攻め、備中国高松城水攻め、大阪城築城(普請奉行)、四国・九州平定等に参加し、天正十五年(一五八七)豊前国六郡の領主として入国、行橋市の馬ヶ岳城を居城としました。翌天正十六年(一五八八)、中津城の築城を開始します。

一、中津城から市内散策



現在の中津城天守

現在の中津城は、昭和三十九年（一九六四）に造られた鉄筋コンクリートのお城です。

中津城は、天正十六年（一五八八）年黒田官兵衛孝高よたかが豊前六郡十二万三千石の居城として、山国川の支流中津川に面した位置にあった丸山城（城主＝中津江太郎）を補修し、現在の中津城の基礎を築きました。

関ヶ原の戦い（一六〇〇）以後、細川忠興の子、細川忠利が入国、中津城の増改築に努めます。さらに寛永九年（二六三三）細川氏の熊本転封により譜代大名の小笠原長次が入国、享保二年（一七一七）には奥平昌成が小笠原氏の後を受け入国、明治四年（一八七二）の廃城まで中津藩主の居城として使われました。

中津城は石垣のみの城として長く残されていましたが昭和三十九年奥平家歴史資料館として再建されました。

しかし、中津城の天守等の絵図が残されてなく、長州山口県の萩城の図を参考に造られたそうです。

平成十二年（二〇〇〇）からの石垣修復整備工事の際、築城当時の石垣が発見されました。当時の築城の跡が見られる石垣が残る近世の城として資料的価値が高いと言われています。

私たちは、今回の「黒田官兵衛を巡る」というウォーキングツアー（読売旅行社企画）の一員として参加しましたが、九州各地から千二百人余、その他の旅行社などのバスも多数参加し、中津城の城内駐車場はバスと人で一杯でした。ウォーキングの時間も変更になり、城の周辺から市内へと数十人ずつの固まりとなって廻りました。説明は市内ボランティアの方がポイント毎に行っていました。

※豊前六郡＝京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐

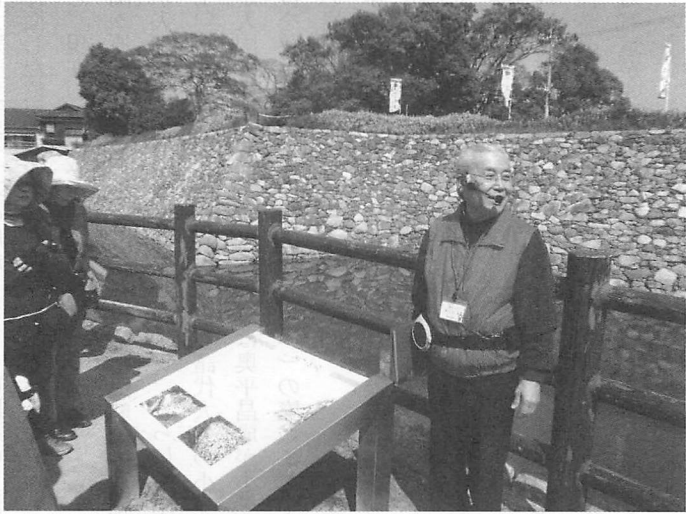
（一）築城当時の石垣の説明 竹下直光さんの話

中津城は入国した黒田孝高（如水）が築城した九州最古の近世城郭の一つです。同じ時期に建築された他の城が、その後次々と破却される中（一国一城令）で唯一残された城です。

※一国一城令

元和元年（一六一五）、徳川幕府が諸大名の軍事力を削減する目的で、居城以外の城を破却する様出された法令。主として畿内以西の外様大名に向け実施された。薩摩藩は法令を無視、大半の城が戸城として残される。

中津城の天守は、現在は五層ですが当時は三層であったと言われています。この濠の後方にある石垣は石垣造りのプロ集団「穴太衆あなう」が造ったと言われています。黒田



黒田時代の石垣（濠の後方）と説明する竹下さん



時代と細川時代の石垣の違いは、角の石が加工しているかないかの違いです。
 黒田時代の石垣の角は加工されていません。濠跡の整備をしている時に「金箔瓦」が発見されています。
 石垣は時代を経るに従い変化し、戦国時代が進むと武者返しなどが造られてきます。しかし、加工せず地震等に強い石垣を造るために、「石垣に「わどり」と呼ばれる彎曲わんまがの部分を持たせます。上や横から見るとその彎曲部分を見ることが出来ます。

石は未加工の自然石を使用しています。小さな石を乱雑に積んでいるように見えますが、自然石の特徴を生かした積み方で、石の奥行きが長く、縦目地、横目地は通りません。当時の穴太衆と呼ばれる石垣造り集団が用いた技法です。「穴太積み」と呼ばれていました。

石垣は反りが無く直線ですが、両端より中央の方がより傾斜している事がわかります。真上から見るとゆるやかな弧を描いている事がわかります。力を中央に集めるよう工夫されています。この濠の中津城側の石垣への階段には、角塔婆(墓石)がつかわれていました。

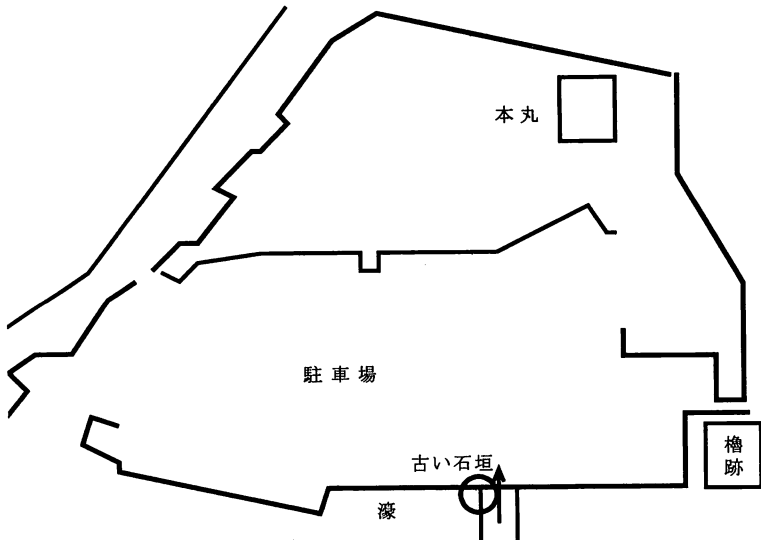
この中津城の石垣の一部は明治時代に壊され、この駐車場のある中津城本丸前への通路となっています。通路の入り口には大きな鳥居が建っています。

この大鳥居の下を潜り南に向かうと左手に、現在南部小学校校門に使用されている生田門があります。

もともとは一つの石垣として造られていたそうです。

この鳥居の左手、石垣の断面に古い時代の石垣が顔を覗かせています。当時の排水溝も残されています。

《中津城石垣マップ》





石垣の断面・古い石垣

(二) 生田門と大手門跡

駐車場の大鳥居を越え南に向かうと、左手に生田門があります。この生田門は奥平中津藩の家老生田家（一八〇〇石）の門で廃藩置県後中津市学校（明治十六年閉校・英学校）の校門としても使われていました。

現在は南部小学校（明治四十三年創立）正門として使われています。

南部小学校の敷地は、この生田家と隣の「中の屋敷」と呼ばれた奥平図書（二六〇〇石）の一部を含んでいます。

中津市学校は明治四年（一八七二）福沢諭吉の建議によ



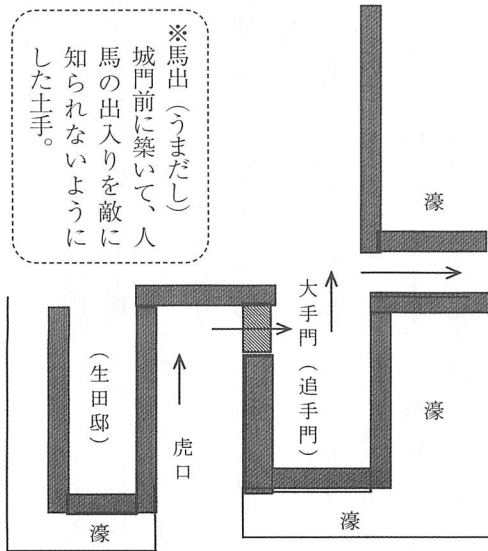
生田門前

り造られた英学校で、西洋の文化・生活様式の学習の出发点とされています。この中津市学校を通して学問の重要性を知らせるために著された本が福沢諭吉著の「学問のすすめ」なのです。

この生田門の前を通り最初の四つ角を左折すると中津城の大手門の石垣を見ることが出来ます。



大手門は三の丸の東端にあり、「馬出無しの枳形虎口」と呼ばれ、前方と左右の三方所に大石で囲んだ奥行十三間(二十三丁)と、幅三、三間(六丁)の枳形があり騎馬武者で三十騎(供武者六十人を含む)、徒士武者であれば約二百五十人が収容出来る仕組みとなっていました。



私たちは生田門前を直進し、奥平家の菩提寺である自性寺に向かいました。

(三) 奥平家の菩提寺「自性寺」じしやうじ



奥平家の菩提寺

この自性寺は、新魚町にある金剛山自性寺とよばれる
禅宗臨済派の寺で慶長年間の開山です。

延享二年（一七四五）以前は金剛山万松寺と呼ばれていま

した。寺内の書院には池大雅夫妻いけのだいがの書画四十七点があり、昭和三十五年県重要文化財に指定されています。また心臓ペースメーカーの父と呼ばれる田原惇すなおの記念碑もあります。

享保二年（一七一七）丹後国宮津九万石の大名、奥平昌成が中津に転封になり、下毛郡、上毛郡、宇佐郡、筑前二十九村（飛地とびち）、備後三十六村（飛地）の十二万四千六百二十石余を統治することになりました。

自性寺は、その時菩提寺の一つとして造られ百石を戴いています。

この自性寺の一角に「おかこい山」と呼ばれる土手が残されています。この「おかこい山」は中津城下町の外周を取りまく濠の城内側にある土手です。城下町を包むように造られている外堀の土手（土塁）は約二十四キロメートルに及ぶ壮大なものでした。明治以降の土地開発で次々と失われ、現在三之丁、金谷口、寺町、鷹匠町にその一部が残されています。

自性寺の「おかこい山」は高さが六メートルほどあり、土手の上から当時の外堀の一部を俯瞰することが出来ます。外堀も昔に比べ小さくなっています。



私たち一行は他の団体と一緒になったり離れたりしながら、黒田官兵衛が建てたと言われる寺町に向かいました。

(四) 寺町―合元寺ごうがん

この寺町は中津城の南東にあたる一帯にある町で、名前の通り、数多くのお寺が密集していました。黒田氏、細川氏、小笠原氏、奥平氏の四代にわたり増改築された寺は荘厳な雰囲気を醸し出しています。

中津市史に載っている寺院数は六十六寺にのぼります。

その中でも有名なお寺は合元寺、円応寺えんおう、西蓮寺です。

そのうちの一つ合元寺は赤壁の寺として有名です。

天正十五年（一五八七）黒田官兵衛孝高が中津に入国する際敵対した前領主宇都宮鎮房の家臣を謀略誘殺した所です。

合元寺は黒田氏が姫路より中津に入国した時、中津の地に来錫した空譽上人を開山とした浄土宗西山派のお寺です。お寺の壁はもともと白壁でしたが、宇都宮鎮房の家臣を謀殺した時、天井・壁・床に血が飛び散り、その後いくら拭いても消えず、現在のような赤壁になったと伝えられています。



合元寺の赤壁

寺内にはその当時の刀傷が今も残されています。

合元寺の事件は、元城井谷城主宇都宮鎮房がおよそ四百年の間豊前国国主として統治してきた伝来の土地を護ろうとして、新領主黒田長政と対立した事件です。

この統治を発令した秀吉は、宇都宮鎮房に四国今治十二万石移封の証判を出しますが拒否されます。そのため黒田氏と宇都宮氏が戦うことになりました。秀吉は孝高と謀り、所領安堵を条件に長政と鎮房の息女千代姫の婚約を約し和睦します。城主宇都宮鎮房は中津藩の祝宴に招かれます。宇都宮鎮房と小姓松井小吉は城中にのほり、鎮房は謀殺、小姓松田小吉は十九人に手傷を負わせ京町筋で討死、駆けつけた家来野田新助、吉岡八太夫も手傷を負い広津広運寺にて追腹。合元寺にいた家老の渡邊右京進等の家来達も悉く討死したといいます。

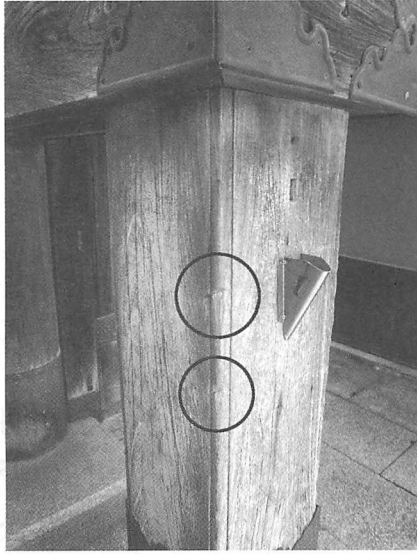
天正十九年（一五九二）黒田官兵衛孝高は隠居し、嫡子長政に譲ります。長政は深く感ずるところがあつて城内守護城井（紀府）大明神として鎮房を祀ります。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦いに長政は参戦します。官兵衛は中津より出陣、石垣原合戦にて大友軍を破ります。同年筑前五十二万石に移封され、十三年の中津統治は終ります。

慶長十六年（一六一一）黒田官兵衛孝高は中津合元寺の開祖空譽上人を呼び寄せ誘殺します。これは空譽上人が宇都宮鎮房の庶子であったためと言われています。

このの小笠原長岡公ながのぶが宝永四年（一七〇五）に松井、野田、吉岡の三氏を小吉稲荷大明神として祀ります。

大正九年（一九二〇）城中に城井神社（御祭神宇都宮鎮房）が再建された時、従士四十五名は境内に末社（扇城神社）として祀られます。



合元寺・刀傷の跡

円応寺は、天正十五年（一五八七）開山の浄土宗鎮西派の寺です。黒田官兵衛孝高の創建とされています。

江戸中期寂玄上人が河童共に佛の道に入らせ、修行させ戒名を授けたと伝えられています。その御禮として河童



共がお寺を火災から守ったといわれています。三匹の河童の戒名は本譽岡覚信士（岡本宇兵衛）・本譽覚心信士（竹本三太夫）・本譽覚源信士（藤本要助）と言われています。境内にはこの河童の墓や河童の池と呼ばれるが墓・池が残されています。

西蓮寺は天正十六年（一五八八）に光心師によって開創されました。光心師の俗名は黒田市右衛門と言ひ、黒田官兵衛孝高の末弟で父、黒田美濃守職隆公の逝去時に出家し中津に移封された際、中津に入り西蓮寺を建立、初代住職となった人です。

私たちは旧跡の残る市内を巡り、再び中津城の三の丸に戻ってきました。